

子どもの頃(後編)

上本 かず

益々戦争が激しくなった頃、高等科に進み、私達もナギナタを習い、その内工場が忙しい高等一年の時、内地の二十歳以上の若い人達は皆兵隊にとられた。

須原の軍事工場で飛行機の扉を作ると何か白い粉をすり鉢ですり、扉の板を貼りつけ板金では何を作っているのか一切秘密でした。

天皇陛下のためお国のため、何でも秘密で私達には遊ぶことも許されない。工場の壁にはアメリカの悪口ばかり書かれていました。

花もつぼみの若桜
五尺の命ひっさげて
国の大事に殉ずるは
我ら学徒の面目ぞ

ああ紅の血は燃ゆる
神風日の丸の手ぬぐい、はちまきをして、そんな歌を歌いながら木の板で作った飛行機の扉で勝てるはずが無い。そ



みんなで楽しいリハビリ体操

んな事一言も口に出せず働いた。間もなく八月十五日、日本は負けた。

その一日前、飛行機が後のほうから何かばらまいていった。アメリカの飛行機だった。日本やぶれたみたいなのが書いてあった。私は体中の力が抜けていくのをどうすることもできなかった。おじや姉もちようど開田から来ていた。

日本は負けたがこんな田舎の村へはアメリカ兵は来なかった。大切にしていた池の鯉も食べてしまい、なんでも恐ろしい毎日が続いた。支那

へ行っていた兄も帰ってきた。痩せてきて栄養失調になってきた。

一人でそつと水車小屋をのぞいて見たら米が少しあるのだから白い米が食べられると思ったそうです。

白いご飯どころか、どここの家も戦死した人や帰る人食料難でいたるところで食べ物を探して、他人のものを盗みに来たとか。私の家は山の中から難を逃れた。里の町の方では、芋やかぼちゃ、イナゴを獲るふりをして稲をこいで行く、なんと哀れなことか。店には何も無く栄養失調の人は皆大変なことである。

私の家では山羊を飼っていたが、餌もろくにやらず泥だらけの所で飼っていたから乳も出ず、父は私に山羊の乳をしぼってくるよう言いました。私は山羊ほどきれいな動物はいないことを知っていました。初めての乳しぼり、いきなり山羊に食いつかれた。餌もやらないでいたので意地が悪くなり食いついた



小学生と交流会

のだ。山羊が食いつくなんて聞いたこともない。それから山羊の喜ぶ草を腹いっぱい食べさせ一生懸命可愛がり、あの餌この餌とかえて乳をしぼった。だんだん乳の量が増え、あの食いついた山羊も私にすり寄ってくるようになりおとなしく乳をしぼらせるようになりました。綱をつけないでも後についてくる。可愛がつてやればそれなりなことはあります。

食べ物を作るため、桑畑も掘り返し、さつまいもやじゃがいも、えんどう豆など沢山育てて自給自足の生活をしました。